

雨が続いた。

梅雨の終わりの驟雨が若犬の毛皮を濡らし、顎の辺りもお腹の辺りも尻尾も滴が垂れ、ずぶぬれのその姿はまるで使い古しのモップのようだった。

何度となく体を揺さぶっては滴を振り払ったが、空腹で疲れた体は、すっかり冷え切って重かった。

「どんな時もへこたれたりなんかしないぞ」

と、そうは思っただけでも時々自分の境遇がすらくなくなった。

いろんな人間たちに遭った。

いい人たちもいたが、皆が皆、若犬を歓迎しているわけではなかった。まして彼は、子供犬ながら大きな犬である。黒くて長い毛足が、その姿をさらに大きく見せた。

そしてその姿と大きさゆえに用心され恐れられ、時に嫌われた。

数日前、何処かの家の軒先で休んでいた折に、不意に棒で叩かれた後ろ肢を引きずって、歩くのもつらかった。

そうやって軒先や物陰で陽射しをよけたり雨をよけて幾日も彷徨い、やがて、ある家の庭にまぎれこんだ。

「今日は此処んちで休もう……」

庭を挟んで、住まいとガレージと、そしてなにやら作業するらしい大きな建物がある。夜になると大抵こういった建物が無人になることは、野良犬になってから覚えた。

建物のポーチに連なって大きく張り出した庇の下には、製材された大

きな材木がたくさん立てかけられ、小さなものは横積みにして積まれている。隠れて休むには格好の場所だった。

雨は、ますます激しくなり、辺りの景色が雨にけむって白っぽく見える。

スレートの庇を叩きつける雨音はずっしりと響いている。

若犬は、庇の手前で、一度思いつきり体をふるって毛皮についた雨の滴を振り払うと、奥に入り込んで体を横たえた。

「ようやく一息つける」

そう思うと、若犬は大きく息をした。

「後は腹ごしらえだ」

夜になって、雨があがった。

月が煌々とあたりを照らした。

夜更けになるのを待って家に近づき、裏庭の勝手口の辺りをうろついて食事の残菜が入ったゴミバケツを見つけた。

蓋がきちんと閉じられていても、犬の本能を刺激するような独特の異臭が漂う。

「これだ！」

とんがった長い鼻で器用に蓋をずらしたが、底の深いバケツは首を伸ばしても中まで届かない。何とか立ち上がって前肢でバケツにつかまり立ちすると、その反動でバケツはひっくり返り、辺りに残菜が散らばった。

その中から魚の頭やパンの耳、肉の食べ残しなどを漁った。

翌日もまた、彼はやってきた。

すると、散らかしたバケツの周りにはきれいに掃除されていて、バケツの蓋には、レンガのブロックがひとつ、重石に乗せてあった。

しかし、若犬にとってはレンガのひとつくらい何でもなかった。

昨日と同様にあつという間にバケツをひっくり返し、中を漁った。

また翌日も、此処に来ては同じようにバケツをひっくり返し、食べ物を漁った。

ところが、その次の日来てみると、バケツの蓋にビニールのシートが被せられていた。しかも、そのシートがめくれないように太い紐で結わえてある。

そして、その横に小さなボウルが置かれていた。

中にはパンのちぎったのがミルクに浸して入っている。

若犬は、戸惑いながらも鼻をクンクンさせて、それが安全であるかを確かめると一気に平らげた。

翌日もまたその翌日も、同じようにそのミルクに浸したパンは置かれていた。

もう彼は、此処に来れば必ず食事にあることを確信し、昼間はガレージの裏や建物の陰、庭の茂み等に隠れていて、夜になると此処に来ることにした。

ある晩、いつものようにミルクにひたしたパンを食べていると、上から声がした。

「あんななのね……うちのゴミバケツひっくり返してたのは……」

若犬は、驚いて一歩跳び下がり、緊張して見上げた。

ラティスの縁から、三毛猫が軽やかにトンと飛び降りた。

「え？ 君は……だれ？」

「んもう……ちよつとお……そつちこそ挨拶してよ……」

「やあ……ども……」

若犬は、自分のかつて呼ばれていた名前をいいかけて、口ごもった。

（……もう、僕は野良なんだ。あの名前を付けてくれたご主人様は、

僕のこと置いていったんだ……だからもう、あの名前は僕のじゃないんだ……)

「……ぼ、僕ア、野良なんで……」

ムク犬のゴンに言われたことが身に沁みだ。と同時に、自分の意思でかつての名前を名乗らないことを選んだ自分に気がついた。

「ふうーん、そうなの……」

三毛猫はけだるそうに後肢を片方伸ばして、毛づくろいをしながら、顔だけきりつと、犬のほうへ向けた。

「あたしはモモ……ここんちの仔よ……ここの人たち、みくんない人ばかりよ。ふかふか黒犬さん、あんた、良かったわね、此処に来て……」

そう言うと、立ち上がってぴよんぴよんと跳ぶ様にして何処かへ行ってしまった。

「……不思議な歩き方だな……」

若犬はあっけにとられて、その後姿を見送ったが、その猫は後肢が片方無いのだった。

つづく